大好き☆出雲！

季刊

弥生の出雲王に出会える

出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

第 35 号 （2019 年 10 月）

★ミニ企画展「出雲の縄文文化と交流 ―京田遺跡をひも解く―」

11月9日(土)～1月27日(月)

近年、縄文時代の展覧会が各地で相次いで開催され、さらに縄文時代をテーマとしたドキュメンタリー映画の公開など、全国で縄文時代に関する話題が沸騰しています。まさに、空前の縄文ブームといっても過言ではないでしょう。

出雲では縄文時代の遺跡が希薄で、これまで空白地帯とみなされがちでした。しかし、縄文時代の後期中葉(約3500年前)の一大集落跡である京田遺跡の発見で、その見方は大きく修正を迫られることになったのです。

京田遺跡は出雲市湖陵町常楽寺にあり、山陰自動車道の建設に関連して2016(平成28)年度に出雲市が発掘調査を行いました。発掘調査では、膨大な土器や石器などのほか、異形土器と呼ばれる関東や東北に特有の土器が出土しました。

異形土器は西日本では極めて珍しい逸品で、丁寧に磨かれた黒色の器面と、その上に塗られた鮮やかな赤色の水銀朱による黒と赤のコントラストが印象的です。さらに驚くことに、付着した水銀朱の産地分析を行うと、北海道産の可能性が浮上したのです。

こうした異形土器や水銀朱を京田遺跡の集落に住んだ人々がどのような経路で入手したのかは、今後の研究課題といえます。しかし、遠く離れた地域とも盛んに交流を行い、多くの人の往来やさまざまな物品や情報のやりとりがあったことは想像に難くありません。

今回の展示では京田遺跡で確認した遺構や遺物を手掛かりに、出雲の縄文世界を考える糸口を探りたいと思います。

また、11月10日(日)には展示の関連講演会を開催します。詳しくは、本紙4頁の「講座のご案内」をご覧ください。 （幡中 光輔）

京田遺跡の主な出土土器

「よすみちゃんのうた」好評公開中！

作詞・作曲・歌：X＋（えくすと）（出雲市観光大使）

お仕事中…！？

2号墓の上に！

よすみちゃんが、博物館や史跡公園に現れる!!

博物館
ホームページ

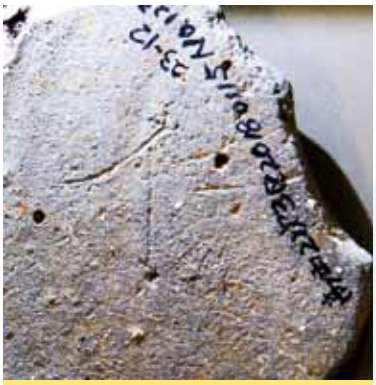
★速報展
「『仁』県内初例の刻書文字 ―高西遺跡の調査から―」
10月2日(水)～2月3日(月)

2017(平成29)年度に実施した、出雲市塩冶町の高西遺跡の調査成果を展示します。

今回の調査は、島根大学医学部の北側から出雲市駅西側に向けて整備中の医大前新町線道路工事に伴う発掘調査です。

調査では、弥生時代終末期から古墳時代に利用された溝と、弥生時代以降の土器や石器などを発見しました。

出土した土器を整理した時、須恵器の坏(つき)の内側に文字を見つけました。詳しく観察したところ、漢字の「仁」と刻まれていることがわかりました。


「仁」と刻まれた土器

この須恵器は、8世紀前半頃に作られたもので、焼成後に刃物で文字が刻まれたと考えられます。

県内では、墨書・刻書土器が約2300点(2016年時点)見つかっていますが、「仁」という文字が見つかったのは、島根県内では初めてです。全国では約150点が確認されており、「仁」は、漢数字の「二」や、地名の一部として使われたと考えられます。

しっかりとした筆跡で刻まれていることから、書き手は書に慣れた、役人や僧侶かもしれません。近くに役所や寺院の関連施設があったと想定できます。

このほか、中世の稲の品種が書かれた荷札木簡や、弥生時代の土器など、今回調査の出土品も展示し、発掘で見つかった文字から塩冶地域の歴史を考えます。

(江角　健)

高西遺跡調査地(北から)

★ギャラリー展Ⅱ
「没後180年　西山砂保 ―出雲の近代医学の先駆け―」
好評開催中～11月25日(月)

今回、西山砂保(すなほ)に関する品として、安養寺(あんようじ)(出雲市大社町杵築北)に残る鐃鈸(にょうばち)と太鼓を展示しています。いずれも浄土宗の葬儀や施餓鬼(せがき)会で使われる仏具です。

西山家は戦国時代に山城国(京都府南部)から大工の棟梁(とうりょう)として招かれ、杵築へ移住したとされています。その際に杵築の安養寺を菩提寺(ぼだいじ)とし、西山家が荻原村へ移った後も信仰したようです。

文政6(1823)年8月、西山砂保は父養迪(ようてき)と先祖供養のため安養寺へ太鼓と鐃鈸を寄進しました。いずれにも、その旨の文が刻まれています。先祖に対する砂保の思いをうかがわせる貴重な史料と言えるでしょう。

注目されるのは、この寄進が行われた時期です。砂保は文政8(1825)年に湊(みなと)長安(ちょうあん)を頼って長崎へ行き、シーボルトに入門しました。このシーボルトが長崎出島のオランダ商館の医師として来日したのが、文政6年7月なのです。つまり、来日の1か月後に寄進したことになります。

砂保が長崎へ向かう際には、松江藩の通行手形とともに、安養寺から宗門(しゅうもん)証状が発行されました。これらは現在のパスポートに相当し、身元や旅行の目的が記され、藩の外へ出向くのには欠かせないものでした。

このことから、安養寺に寄進された太鼓や鐃鈸には、宗門証状発行の依頼の意味も込められていたのかもしれません。砂保はシーボルト来日の報をいち早く知り、長崎へ向かう動きを始めていたことがうかがえるのです。

(髙橋　周)

砂保と父養迪寄進の太鼓　安養寺蔵

★第54回出雲市無形文化財発表会 11月17日(日)

無形文化財に指定されている神楽や獅子舞など、地域の誇る伝統芸能が一堂に会して華々しく上演します。

神話のふるさと「出雲」に悠久の時を経て、今もなお息づく技と心を体感してください。

神　楽

獅子舞

盆踊り

■時　間　10時～15時30分
（開場 9時30分）
■場　所　大社文化プレイス
うらら館
■入場料　当　日　500円
前売り　400円
中学生以下無料
※10月下旬から前売券販売予定

★日本遺産 日が沈む聖地出雲の文化財（最終回）

日本遺産「日が沈む聖地出雲」を彩る構成文化財紹介もついに最終回！今回は、北の日本海に面した鷺浦と猪目洞窟を紹介します。

①鷺浦のまちなみ

急峻な山々に囲まれた港町・鷺浦。湾が深く、湾口の柏島が風よけを担う天然の良港で、江戸時代には北前船の風待港として船問屋が建ち並び、明治時代以降は商船の寄港や銅山の開発によって大きなにぎわいを見せました。現在は風情ある静かな港町です。

毎年7月末の夕刻、柏島を舞台に「権現祭り」が行われます。夕日を背に、大漁旗をなびかせた勇壮な船列が島の周りを一周し、豊漁と海の安全を願います。

権現祭り
（2019年7月31日開催）

②猪目洞窟

「…西の方に窟戸あり…夢に此の磯の窟の辺に至らば、必ず死ぬ…故…『黄泉の坂、黄泉の穴』と号く」

（『出雲国風土記』「出雲郡宇賀郷条」抜粋）

ここに記された黄泉国（＝あの世）に通じる場所のひとつと考えられているのが猪目洞窟です。国史跡に指定されている洞窟遺跡からは、弥生～古墳時代の人骨や埋葬跡が発見されています。死者を葬る場所である、という言い伝えが、『風土記』の記載に反映されたのかもしれません。

猪目洞窟（内部から）

奈良の都で編纂された『古事記』『日本書紀』の神話にも、出雲は黄泉国に通じる地として登場します。その背景には、出雲が都から見て日が沈む北西の方向にあり、異界に繋がる聖なる土地であるという認識があったのでしょう。

（景山 このみ）

★体験メニュー紹介　第1回「勾玉づくり」

石を削って磨いて作り出す勾玉づくり。作ったことがある！という方もいるかもしれませんね。

しかし、当館では、一味違う丸っこい勾玉を作ることができます（写真）。

この形は、西谷3号墓から見つかった、青いガラスの勾玉がモデルになっています。

すでに他の形のを持ってる！という方も、まだ作ったことがない！という方も、当館オリジナルの、かわいい勾玉を作ってみませんか？

勾玉づくりのようす
（おたっしゃ会のみなさん）

★展示のご案内

▼ミニ企画展
11月9日(土)～1月27日(月)
「出雲の縄文文化と交流
―京田遺跡をひも解く―」

●ギャラリートーク
11月30日(土)、12月14日(土)
1月18日(土) いずれも10時～

▼ギャラリー展
好評開催中～11月25日(月)
「没後180年 西山砂保
―出雲の近代医学の先駆け―」

●ギャラリートーク
10月20日(日)10時～

▼ギャラリー展
11月27日(水)～
2月24日(月・振休)
「出雲の赤 古墳時代編」

▼速報展
10月2日(水)～2月3日(月)
「『仁』県内初例の刻書文字
―高西遺跡の調査から―」

※いずれも観覧料、参加料ともに無料です。

★講座のご案内

▼ミニ企画展関連講演会
11月10日(日)
「縄文時代の暮らし―京田遺跡と最先端の研究から―」

●講 師 山田康弘氏
(国立歴史民俗博物館 教授)
●受講料 無料

▼館長講座
今回は「モノから歴史をひも解く」をテーマに開催します。
11月23日(土・祝)
「瓦から島根の歴史をひも解く」
1月25日(土)
「須恵器から
山陰の歴史をひも解く」
●講 師 花谷 浩 館長
●受講料 各回300円

※いずれも、
●時 間 14時～16時
●定 員 100名
講座の受講には、事前申込みが必要です。電話・FAXでお申込みください。

★体験メニューのご案内

▼勾玉づくり
●料 金 313円
●所要時間 約60分
※博物館で作る場合は、事前に電話・FAXでお申込みください。また、持ち帰って家で作ることもできます。

★館長古来夢(こらむ)

今年2月、中国唐代の書家・顔真卿(がんしんけい)(709～785)の特別展が東京国立博物館で開催された。著名な作品が目白押し、ために会場は押し競饅頭(くらまんじゅう)。観覧後ひと息入れて、東洋館へ向かった。数年前にリニューアルしたが、全部は観ていなかったからだ。地下にはクメールの彫刻群、ヒンドゥー教や仏教の神仏像および建物の装飾石材が並んでいた。いずれも優品ばかり。さてどんな経緯で収蔵されたのかと解説を読むと、1944年秋、フランス極東学院との美術品交換で東博へとあった。先の大戦の真っただ中だが、交換計画は1941年から進められたという。なるほど、と合点した。

1939年、ナチスドイツのポーランド侵攻で欧州大戦が始まった。翌1940年春、ドイツがフランスにも矛先を向けると、ひと月でフランスは敗北し、フランス政府はパリの南約400キロの小都市ヴィシーに移転した(ヴィシー政権)。これを好機とみた旧日本陸軍は、同年9月、当時フランス植民地だったインドシナ(現ベトナム北部)に兵を進めた(北部仏印進駐)。翌1941年7月に南部仏印に日本軍が進駐すると、アメリカは石油の全面禁輸を発表、12月の真珠湾攻撃へとつながっていく。日仏間で美術品の交換協議が始まったのは、まさにこの時代だった。

作品を東博が受け入れた1944年秋、すでにパリは解放され(8月)、ヴィシー政権は崩壊していた。ルソン島にマッカーサー率いるアメリカ軍が上陸し(10月、マニラ陥落は翌年2月)、サイパン島からB-29が東京を空襲し始めた(11月)。度重なる東京空襲にも、幸い東博のある上野台地一帯は大きな被害をまぬかれた。おかげで、いま端正な顔立ちのクメール神像と対面できる。だが、その背後には暗い戦火の歴史が塗り込められていることも知っておきたい。(花谷 浩)

(発行)出雲弥生の森博物館
2019年10月
〒693-0011
島根県出雲市大津町2760
(TEL) 0853-25-1841
(FAX) 0853-21-6617
(E-mail) yayoi@city.izumo.lg.jp
http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori
●入館料/無料
●開館時間/9:00～17:00
(入館は16:30まで)
●休館日/火曜日
(祝日の場合は翌平日)
年末年始